繪本豐臣勲功記

初編

貳

遠13
2209
2

門へ遠 13 特
番 2209
巻 2

繪本豊臣勲功記初編巻之二

目録

日吉丸仕私下家号義吉
附 親勲武藝
中村茂右郎強従松下軍
附 両家競隊

羽吉郎高吉初戦打伊羽
附敕を光る
今川小条旅留士野和睦
附蘆吉光志

繪本豊臣勲功記初編巻之二

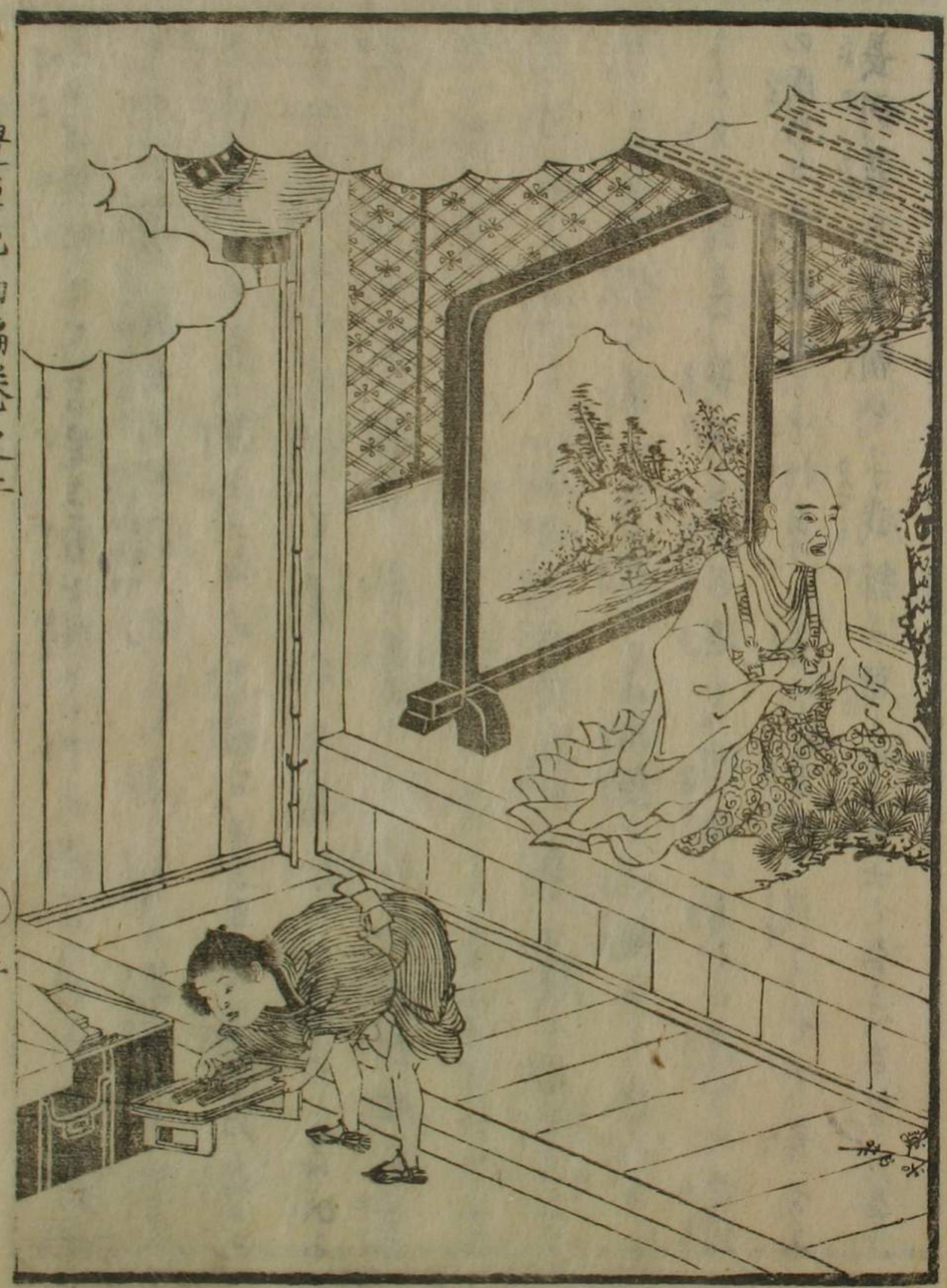
江戸　櫻澤堂山　編輯

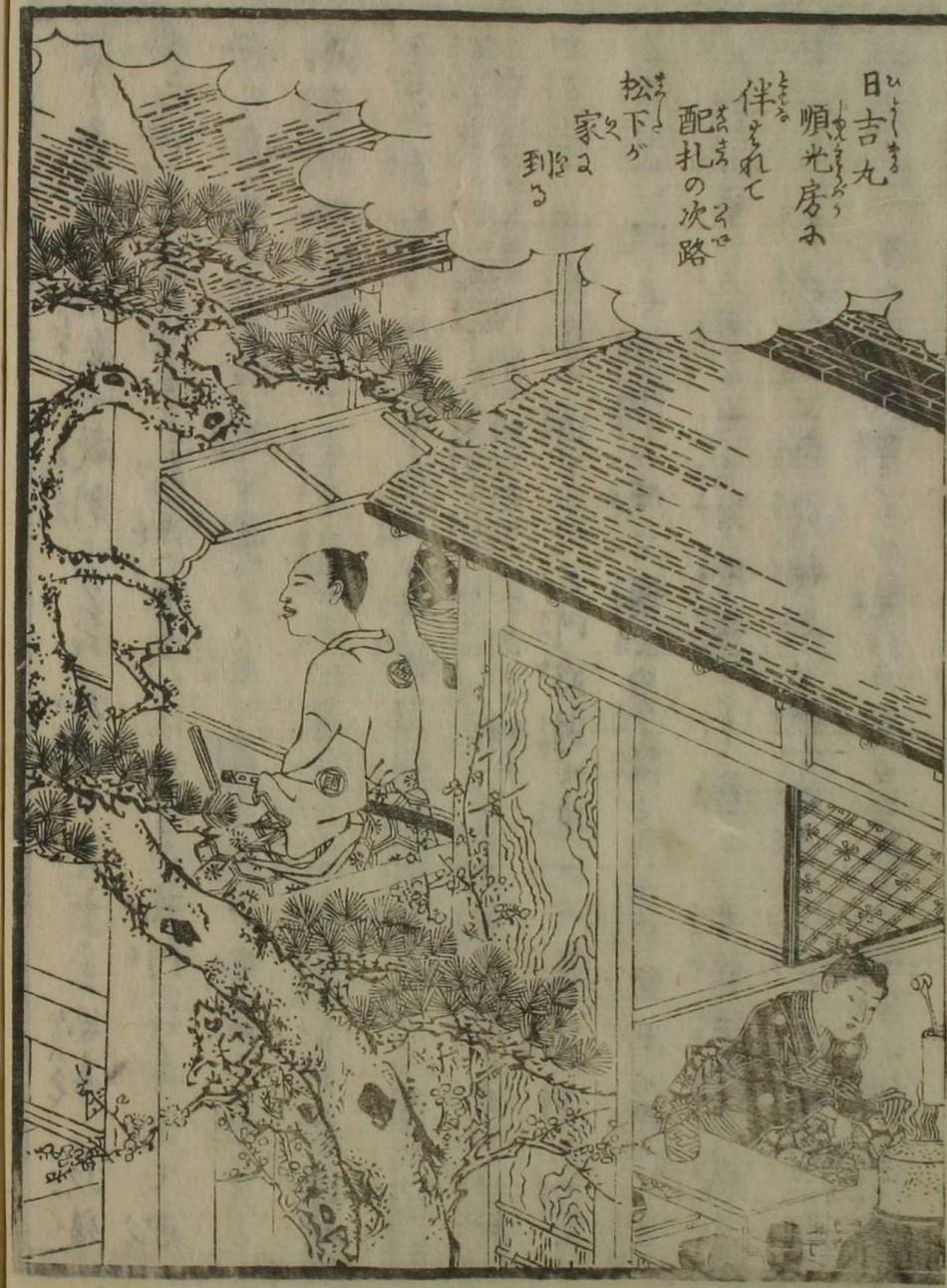
日吉丸仕松下家号藤吉郎　観熟武藝

萬事心と用ゆる朐ハ。飛花落葉も技藝とや。然べ中村日吉丸ハ順光房ゑ従て。東國へ起きしゝば。五郎他左衛門安途せしゝど。母ハ郎て往涯と。案ド續けゝ東ゑ西ゑ。発旅ゐゝる當日より。只選ゝべき日と算へ。待徑ぬゝハ愚ゑ偽つれゞ。その親らゝ児と思ゝゑ。衾推總て斯こそあれ。然ども養父紀阿弥ハ。日吉が偉とは外ゝ。さゝて更ゑ善悪謂ねべ。母の於仲ハ底意と知らず。剰その偉ゑや思ひけん。紀阿弥ゑゝち對ひ。喃大良人ゑハ日吉が偉。斯すゞ万き羊止しゝて。持て剰しゆる哀のゝ有ゑ。異見と爲てハ賜たらぬと。辞座ゑ怒すれハ。

就阿弥を仲ゝ語て謂やう。咲くその詞ハ理なれど。日吉丸ハ尋常の
児輩と全く類ふあらず。されー駒の奇瑞といひ。亦生長の動静ハ
氣隨なれども悪事と做さず。父祖なる弥助国吉が。大願の旨も祖
聴傳へ。倘その願望日吉が身ゝ。應ずる緯のあらんゝ。俺們ども
きが仂ゝき。教訓しつとも何ゝせん。天神地祇の擁護まりく。ゝ何
なる深山幽谷ゝ。棄安バとて失るく。猪狼の類すも。却て渠が輔
とあるべし。或ハ海波ゝ漂ふとも。鯨鯢蛟龍魑魅と振ひ。鼾と張て
護るべし。所頃意とやある。我方僅日吉が身と占るゝ。阿姑が
産ゝ臨むー日の。瑞相ゝ思議あるのとう。靈夢ゝ感ずて懐妊せー
緯。絶ふこれと聴てさく。心決して疑がなゝ。阿姑ハ厭と眼前。示現
蒙る身とゝく。早くも忘るゝ。如ゝ這緯吁賢他ゝ

漏しゝ。潛然ゝ教訓しければ。於仲も実ゝと思直し。以後
嘗て日吉が緯。煩もる氣色ハありけり。然るゝ就阿弥年老て。起
居も自在ならざれば。婚と迎へく家と讓り。身と安楽ゝ過さんと。
海東郡砂子村なる。長尾某が子と將て。日吉丸が婿なるゝ。計歳
十七ゝ長ぬるが。柄人として此ゝ倜偶し。弥助吉房と号らせう。（右馬允久吉と号し。從五位下武蔵守ゝ任ず。一騎法印則是吉房が生國を高根村或ハ智多郡大高村とも。諸本の誤歟）這又話ハ因つ。差ゝ中村
日吉丸ハ。順光房の倶とし。三河路過て遠江と。道と決身ゝ隅も
なく。標と配りて行向く。城主領主の分限より。山川郊野の地理と考。
城邑村市の人員とも。多少増減とよく察し。要涯進退の図を
量て。且ハ貴賤の品と料簡。指呼と待で配札の。大小とりて路別されば。
順光房ハ殊の外。調賣ぐりて悦びつゝ。日と経て濱名ゝ到う。此所ハ




日吉丸
順光房ゐ
伴それて
配札の次路
松下が
家ゑ
到る

今川の領地にて。名聞る勇士駿きが中に。濱名の地に軍學師松下源太左衛門尉長則（加藤兵衛尉之綱の父）住しゐ。是い今川の旗本にて。軍器兵法に雙なければ。謀主とゐて甚禄と。千五百貫賜はる。爲に多賀の順光房。這松下と年来より。師檀の好惇うしくび。ひに来て両三日。行疲と休めゝ滞留せり。這舘の奴僕婢嫁們。日吉丸と眼に見ゝ行。猿に似うと嘲咲ひ。散るに集ふそれのを。罵讃稱して喧きが。加兵衛之綱快听取。奥ゞる緯に思ひしゝや。常麦麿に招て菓子など賜へ。その相貌と沈觀をし。庸人ならじと父に語れば。長則も又召進し。何國の者ぞと尋るに。尾張の國なる愛智郡。中村なりと言ゆる音声。爽にして大音なり。長則荐日吉に朝ひ。子我舘に留りて。武士とゐるべき望ゑゐきやと。問まて思らば崔躍し。是年来の所望なれば。是非に給仕と預べう。然りとゐくとも順光房。猶巡行の半途なれば。仍此に留りゑ。明天より供に事爾ん。長くもあらぬ旅なると。巡てらば荐び奏り。而して市國と受ぞきまと。暑も賢き應説に。長則父子感佩す。さたゝゝ克ゝ務かて后。歸来れと詞と約し。順光房に扈從て。遂に駿河へ赴きけるが。日吉は猶も心と用ひ。今川家なる大身小身。踐らば巡て家風と料簡。函嶺と越つ伊豆相摸。免符の國と巡配し尽し。春過夏に移る頃。我國近江へ扯返せ。而しゝく濱名に帰途なれば。荐び松下が家に至り。日吉が緯と繰ゝ憑ゝ順光房は國へ帰りぬ。斯て松下長則は。日吉と家に留置。之綱が舎弟友次郎とゐくる。此年九歳に長ぬるあるゝが。傳ゆる者の病に

犯されし 皇とそうて在ざりしうべ。彼友次郎が傳えるを。心信せず遊び
せしう。諸本友次郎を以て之倶の子とせり。実は之倶の男子あらんや 原来日吉が性質。辯舌殊ふ達オ
なれば。累夜の世話戯談。鬼と語り佛と説。月日の方なる國巡。
草木黄なる嵩諏。螟蛉の足と蛇ふ添。羊の角と鬼額ふ載め
最おもしろふ門語るふ。姫輩まで歌ふ轉へ。能者ありと愛憐ず。
然るふ主長則ハ。壯士と召聚め。太刀或ハ鎗合せ。夜ハ孫呉の兵
書と講じ。篤實とのと施して。士と養ふ律怠りなければ。日吉ハ
これふ望満て。晝ハ終日講武場の。隅ふ跼ひ見物ず。夜ハ亞
廳ふ蹲て。軍録兵志の講義と聞こと。滋味と嗜むふ異なるぞ。
寸陰の間も軽んぜば。心と烈し。學ぶちふ。日吉九年長て十八歳
日結九十八オハ天文廿一年ず ふぞ。ありふける。長則の嫡子之倶も。此春ハ已十七歳

ふて元服と加へられけるば。序ありて日吉九とも。角髪せさせて男ふ
成し 藤吉郎と号らせけるば。厚證ふて刀一口。是と賜ふて役とさへ。
掌履ふ進ずせしう。まとう藤吉郎剛膽ふれば。亦ものや刀の悪きと
嫌ひ。紙令騰履と掌身ふも。這服の刀と弟しふ。要緊の秋の用
ふハ成らず。愈此一鋭味よき刀と。賜らばやと咲しと朋輩聞て大
ふ憎を。主人の賜へし刀ども何不足ある緯やうる。いと不禮ぶき
る論ぞと。叱責まば藤吉郎。不禮過者と叱りふる。騰履掌
る身ハ主人ふ離まぞ。影と響の像くあり。萬一事の変ありらば。
主人と扶て防禦と做さんふ。利鋭刀と弟せざれば。其詮雷てそ
うべし。と理責て言噤ると。之倶廳隔ふこれと聞。實ふ理なる
言條なる。渠が望とと稱へさせんと自平日ふ弟しなる。秘藏の刀と

既へけれぐ。藤吉家遺推頃き。崔踊みて歓びて。之綱ふ朝ひ謂ける。人元服と加める駒い。實名も共ふ付ることら。父よく是と語りふき。某も亦何とらいふ實名附て願たやと叮て之綱厥もいらん。文字ふ望ちや有と問べ。然侍吾父ハ昌吉と号するれば其文字ふ。應ぎる名とそ晞しれ「然らば父の一字ふ據。高吉と号るべし。汝が産き地名れば中村とりて姓と為よそく。中村藤吉郎高吉と。姓名勘て熟備せり。年の長るふ隨て。愈く增く獰りみ。軍学兵法ふ耳目と列ます。見練武場ふ伺候して。飲食と忘き見物せり。茲ふ川嶌宇一といふ。松下の門人ける。性質血氣の揣男ふて。常日の起居言謂ざき傍ふ人みきが若し。連日ふ中村藤吉が。鍊兵場へ来て見物まると。坐ふ揺て

謂けるやう。這ハ一方みらざる道場。子輩の投る場みらき。快き退ようでし又。武藝と覚める心やある。有みら来き教くふまん。些ハ痛き面苦しき面も。忍び堪める骨みければ。藝道鍊達みうがくと。意根悪く言盤きば。藤吉郎もおのれと懐へど。甚ハ顔色ふ露さぞ。宇一ふ向て辞と輙げ。鍊武做くさふ觀るみらき。這道場ふ在るうちハ。ふ何みも心健くし。壽るやうふ思ふ故。日く見物しつるうと。いのふ川嶌。厥計ふ思て。学みて昇速うるべし。一刀我と刀合て。試せと木太刀と差付。強付きとも這方ハ卑下みし。貴公ふ及ぢんや。刀合こと敢されと。辞退すれども。容ぢき。川嶌やく弱味ふ乗じ。斯ハ憑病みる根性る斯る胤輩ハ這場ふ置れぞ。疾退去ると利着られ。藤吉莞爾と笑

藤吉郎演習場ゟ
迫せられて遂ゟ
川島宇市ゲ
慢額を打碎く

ながら。課せのごとく日くゝに。見物もるも修行のうち。輸さればとて羞
ふもなからむ。厥手をゝ勸めゝ
拉者ぐ持さる木刀。對人の顏ゝ中りぐ。這上もるき不禮ゝ。厥故
容捨と睇ゝ。听て川嶋大ゝ怒り。憎き猿面ぐ一言うゝ。自己ゝ
無技と鄙さんと他と下涤蠅類め。先骨肉と飛してうゝ。思知れ
やといふ采ゝ。木刀推掌起向ゝ。藤吉ゝ今ゝ辭もるゝ道ゝ。云禮
沛免と木刀搔掌。翻然と鍊武場ゝ跳投。川島宇一ゝ藤吉と
唯一撲と雙立ゝ。宇一ゝ勝ち〳〵大漢。藤吉郎ゝ他族ゝ外ゝて
標立綾男ゝれば。十指十目藤言とそ。ゝもゝ〳〵宇一ゝ撲殺られ。
憐ゝ命も危ゝらゝと。汗と流して看護ゝり。宇一ゝ猎声〳〵藤
吉ゝ。眉間と臨て打投太刀ゝ失。心得ゝうと丁地受止。退ぐもゝ

の飜ると看えゝ。川島宇一ゝ目の上と。斜面ゝ発止と撻。うゝられて
宇一ゝ眼中眩ゝ。怯むところと着投て。持ゝるまゝとうち落し。勝負
いゝふと喚〳〵ゝ。傍の武士一齊ゝ。もゝゝ声と抖起て。藤吉〳〵ゝう
と誉ゝうける。川島大ゝ面皮と泥て。洵ゝけれど木刀と拾ひ非慢
の拳和ゝらぐ。今一遭と怒立蒐ると。藤吉輒〳〵と打笑ひ。其上ゝも
亦癜點ゝ。乳の毒ゝうと言棄て。主人の許ゝ退歸りぬ川嶋宇一
ゝ瞋懷ゝうゝ。家ゝ歸て所労と言立。他ゝ面會せゝらしゝ。厥ゝ
知らぜ松下長則。夜毎〳〵の軍講ゝ。宇一ゝ出席せゝると訝り。何
ゝ不參と聽者ゝ問ゝと。門弟係ゝ顧てより。宇一と憎在ゝり。猝
ゝ。藤吉郎と較量の預相。告ると听て長則怪ゝ。且驚て云ける
〳〵。斯ゝ心得ぬ言ゝとそ。宇一ゝ剛き修錬の壮士。藤吉いゝとゝ

何ぞ。けんや。仏言構て誠一ならぬを。根ふ葉ふ化して聞人ぞと。亞麿ふ控
て一藤吉と。膝下近く招き侍。實ふやある錬武藝ふて。門嘗宇一と
較量ふ。渠が面へ癡黙なるあや。いかゝも主公の尋ふ違えぬ辞退
もれども。諾みき采。據ふ一刀合て。驗と一撻ゝ。「斯い奇特
ふる挙止ふ。さゝ我館へ来らぬ己が。学び一弾のあるやまる者へ
幼稚の甫より。他の錬磨と見物して。獨工夫と做ふるのを。他ふ得ふ
て刀合せん。門島大人が勧て。所て長則増し感ず。然ば子が
術の浅深。試んふ我自。對人ふ為て一太刀合せん。先甚ふて試
よ藤吉と。木刀と與へくゝ起上れば。斯い辱き仕合ぞと。辞ふる色ふ
立對ふん。大張天下と料理まる。肝襄見えて驍ゝ。
中村藤吉郎強従松下軍屬両家競隊

鬼と鬼と観決むれば外ふ怖ふ物いまゝと。中村藤吉郎高吉い
西東と決する緯速ふれば。他年老功の長則と刀合られど。二も
臆せぬ。優ゝて凡人ふらぬる藤吉心中ふ深く丹練せ天真正の
一の手刀鋒鋭く打発ふ。一上一下の電光石火見えず隕ふ鋭き
剽姚凡ふ狂へる虎豹の像ゝ。雲飜ぐて龍蛇ふ齊一右と見
ゝば左と撲肩と避れば裳と撞さゝぐら八臂もあるや為と怪ゝむ
計の揮きふ。有係の長則心ふ恐怖一。吁未曾有の掌のうち
ふる王己勝負と決るふ及ぬ長則強感佩せると。水刀と控へ
座ふ整居列座の諸士ふうち對ひ。各諦ふ聴ふく萬方い是
一心より修練もとゝふ金言あり。今眼前藤吉郎が他の錬武と
見えるのゝ較量とせ一緯さへふく唯心中ふて工夫せ其兵法ふ

年久〳〵鍛徹する長則まら會教ゞき拳方ハ是一心の做ところ
宇一どきかいりをゝ涸をん。吁恐ろしき少士やと要時も依ゝを讃嘆
せり。結て中村藤吉郎濱名ふ在とと五年ふ涸ゞど。出陣起軍の
沙汰もあく徒ふ兵武と磨くのゝ空〳〵諸居を過〳〵けるふ
明るゞ天文二十三年。相州小田原の城主ある北条左京大夫氏康
同嫡子相摸守氏政。今川義元と拵ふ暫び。氏康関東八
箇國の軍勢四万五千餘騎。函嶺と馳起駿州へ乱入まる由
聞えられゞ。今川方ふも防戦の準備とあさんと領分ある駿遠三
の軍兵と催促〳〵つる中ふ就て。松下長則之綱とも汗旗本ふ
参陣をゞ〳〵と。別書の樊文ふ長則親子出馬の準備嚴ある
中村藤吉高吉ハ。快ゞの緯を听〳〵も先這遣ハ俱ふ從ひ

類の拵做んあと。只管主人へ聘けるゞ。亦何ある思慮のありつるゝや。
長則これと許されゞ。厥緯を用と制止せられ。既明日ハ出陣ある。
藤吉方僅ハ許容ふ〳〵。止まるべきふあらぜと思ひ。兼て懇意ふ
ある〳〵る鄰家。石堂藤左衛門ゞ方へゆき。是非ハ今般の軍ふ冨
と粉ふて拵うんと。主人ふ俱と聘ゝとゝ。那何ある由ゝや召
伴ゝをゞ。然りとて徒ふ止りゞ〳〵。這緯ふ属てを心ゝゞら。花金錆
ある鎧ふまれ。一領あらゞ請讓う。唯管聘ふと听て石堂。いろゝも
讓ゝあるべし。憂時待されよといをゞ〳〵。後堂より一具の古鎧を。
提来て塵打拂ひ。藤吉郎ゞ家ふ置。最竺美を既へられゞ倘
松下ゞ目と属て。その鎧と同ゝん駒。買討〳〵と言ゝんふ。價賤きハ
貴〳〵るべし。因て古經〳〵甲冑を。進上ゝをゝろゝ。糸見苦〳〵

と勝鬨をあげ。次取の軍の首發と。祝しもつて一軍起て。調酒土巵提来り。核會よく這の栗もあり。一搗せんと樅りて。拗でその柔き出せば。藤吉郎はうち歡び。幾方うき清澤。よき首歐く高名の。標と足下へ握頭かせん。吁厚くこの柔の。速く鎧ひき被ぎ辞別りもつて初足亞足。芒萱踏締うけ。主人の痕と追ふ。松下長則仝之綱。遠くも往とて荒井濱の。波うち洟と過る時。藤吉郎は走着て。主人の馬糞ふ驚きる。松下弐子これと看て。その打扮は那うかせ。鎧は孰ふ借りて。問と待得て中村高吉。己ふ石堂が教へ。こで。濱名の市ふて買討め。勝べき吉辞の鎧と看へ。長則も今は止めるる。打体えて出陣せり。然計ふ小田原の城主。北条氏康一子氏政。坂東の兵と雷発せり。天文二十三年一月中旬。小田原城と発軍る。駿河路當て推進る。府中の城ゆへ。今川治部大輔源義元。（今川五郎氏輝早世して子息なり。因て舍弟瀬戸禪德寺默堂和尚の弟子良真と還俗させて家督とす）則義元の父は氏親。是と聞て大ふ怒り。席と叩て云けるやう。素小田原の氏康は。我母北川殿（今川氏親の室）の舍兄。伊勢新九郎氏長（入道して早雲寺と号す）の孫なれば。故修理大夫（氏親朝臣）殿とは伯父甥ふて。我と渠とは從弟別腹の血脈なれば。疎くるまでき緣ふあらまぢや。且亦早雲入道は京都の奉公衆なりしが。漂泊なりて東國へ下向し。身の立国もなりしが。我祖父（治部大輔義忠）渠と憐で。興國寺（駿州富士郡下方庄ふあり）の城主なりしふ。故殿の加勢あり。故ふ。伊豆相摸とも斬隨ぐ。遂ふ関東八箇國ふ。威と種うもも。誰ふ加護なるぞ。北条氏康その孫として故殿の恩義もうち忘と。我采國へ兵と將て。もせ朝人條。

藤吉郎
鎧を借請
後走
松下が勢ふ
加はる

不義ならんを禮ならんと。道を背ける夷狄の奉止。急ぎ富士川を出陣して。退退んと。敦圍検書を回して。評議も成きず領國へ。支嚴に拘うして。駿遠參の惣軍勢。合せて二万五千余騎。段々に隊伍を構。富慈川の南へ出陣せり。原先陣の大將へ。朝比奈備中守泰淳。（右兵衛大夫泰淳の長男遠州掛川の城主二万六千石を領す）二陣へ飯尾豊後守武茂。（遠州引馬野の城主豊後守貞連の子一万六千石を領す）備二陣へ總大將。今川治部大輔義元。一萬二千の猛騎を率へ。左右に連る勇士。庵原右近大夫忠春。（安房守忠胤の三男二千二百石を領す）温井藏人。富永伯耆守。関口越中守。井伊肥後守。江間左京亮等羽翼と成て。次第に隊伍を構へ。結る怒へ。松下源太左衛門尉長則。嫡子嘉兵衛尉之綱。着陣せり と言條も。是に寄て。松下父子と。小荷駄奉行とぞ定められる。

偖亦北條氏康へ。伊藤日向守と先陣す。二陣へ大道寺駿河守。三陣へ松田隼人正。各軍兵五千餘騎とぞ牽ひける。既に富士川の東に魚鱗と成て隊伍。大將打集評定しけるに。斯大軍と緑発し。大河を隔て睨居るも。果しなければ速に。川を渉て今川勢と。赴拂さんと先隊をる。伊藤日向守真魁に。馬に拍て騎出も。這と看るすに續けと。坂東武者のあらひなれば。死生も厭はず。短兵急。一度に川と毆渡し。今川勢を鏑崩せと。伊藤が軍勢五千餘騎。一雜もせず沖駈る。朝比奈備中守これを看て。三千餘騎を二隊とる。身方と眄指揮して曰。五百に鎗を鞍渥に。真面目に當て駈散よ。浅る五百に馬に離を。敵を待得て鏑を。右の千騎と左の千騎に。合響を待て堤陰より。先鋒炮を打うけよ。

駿州
冨士川の
合戰ま
朝ヒ奈泰次
先陣ーそ
伊藤日向守そ
砂崩と

敵の色合よき程ふ。箭節間作て射駈べしと。心静ふ指揮を傳隊伍と堅固て鎮り待。日向守が五千の兵士。齊く川と渡りそいる。鯨音とこゝろて今川の。先陣真當て鏑駈る。備中守が五百の歩兵。陣門颯と推開き。面も振らも鎗芒そろく。亟二亟三ふ撫これべ。伊藤が魁隊の馬兵衆。竪足取次ふ色めく慮。其と見沈して朝比奈ふ備中守。時分はよしと合鄉晉の鬨。鏻〻戛哩と响ふ程そ。左右の埋兵一途ふ発起。四五百挺の鉄炮と。筒前聯て打うちけり。煙の下より精兵の。弓伍と續て雨霰。隙際もいくせも射させしぶ。伊藤が軍兵不意と打ま。足半進持得も。川涯當て敗走せり

藤吉郎高吉初戦打伊藤属救主危急

豪傑よ〻百方の敵と防ぐけれと。千騎の自方が敗走と。推て留むる術ふ〻有繁の伊藤日向守も。偖崩ふ川縁まで。懐えも馬と退去らせけるが。這ふ自方の溺れん緯と。心労く懐ひければ。踏止まて大音揚。爭相蓬ふ〻我隊の兵衆。敵ハ自方ふ載ぶれば。多寡の紛る小勢ふるぞ。見馬強の勇士衆。正魁ふ進て駈倒せ。敵の方へ芽と向て。後指とさゝるぞ。恥と知るや笑えるな。返せ〻と采配も。振切たりふ下知もれば。這一言ふ烈へきれ。伊藤が兵士一千餘騎。駒の足撥と立整し。取て返して朝比奈が。五百の人馬を駈惱も。朝比奈方の兵輩。勢微ふければ如何てう敵せん。落び後へ跋跌され。右往左往ふふると看て。朝比奈備中守声烈す。敵ふも似ぬ自方の卒止。命惜むい武士ふらぬぞ。高名ふきえと思人ふ。我ふ

續けと一喝號き。風と起して伊藤と同當。騫真地ゑ駈うーゑ。五百の兵士心と励まー。噫大將ゑ先拍ま。ゑゑ面目ゑ活長ん。死ねや死ねやと異口同音。呼び噪きて五百餘騎。沸潮破山の勢ひゑー。正黒ゑ成て冲投う。厥と見るより備中守ゞ。左右の二千騎一隊ゑ成て縱横無碍ゑ揉ぐうーゑ。伊藤ゞ軍兵今ハ既一鎗半戟遮へもせず。崩起う自方そび。日向守ハ鑿斷とるー退ゑ退ゑと下紅もれとも。耳ゑも更ゑ吶入ず。脚より頭と先ゑゑー。他と超てぞひき退く。伊藤も方僅ハ詮うと喝。川岸隔て躊止り。戰して在うちゑ。敵も自兵も東西へ。退うーゑ絶ゑ安途ー。心靜ゑ退ぞんと。自兵の渡る川の瀬の。淺深と見て霎時ゞ程。堤の陰ゑ勒う。ひ時中村高吉ハ。松下ゞ陣ゑ在つるゞ。長則親兒ハ後陣ゑる。ゑ荷駄の奉行うーゑ。厥家の兵士一人も。出戰せる緯を許されも。是ゞうもゑ藤吉郎。心と涸りいうゑもして。先隊ゑ加うり。一揮きー。高名せやと思へとも。松下父子ゞ隊相嚴重ふーく隙子ゑけまハ。雜う出べきやうもゑー。那何ハ做んと思案のうち。急度工夫の出うーゑ。情と興炊場ゑ奔往。飯箭持て陣頭。斑放ーて高声ゑ。東の陣の兵糧ゑり。賓參るぞと呼りゑゞら。松下ゞ陣と出るやうゑや。箭と傍遑ゑ投舍て。翱ゞ如くゑ戰場へ。走往見れば早既ゑ。北條方ハ崩起。我後もーと富士川と。浮沈う退く相ゑり。藤吉郎ハ心ゑ工夫ー。濃陰ゑ駐まて覗うー。ひと言き功名誉柄る成さんと。獨笑つ堤の陰の。花盛ゑる柳ゞ下ゑ。躲居うー心の賢作。今日初陣の藤吉ゞ。鬪戰の相摸を

見破る。退口を待て毆んとす。實に凡人にあらざりけり。頃ふ如月央に。草樹と共に生栄放も。春の雪浦の水漕せらる。河風颯と吹伝ふ。鞠の塵とも見作らる。柳の花の紛こと。散らる鎧の袖。打拂ひて堤の上と。瞳定めて觀連せば。是や名に負ふ勇士と見えて。紺糸威の大鎧に。駿き馬の紫驪さ。肥く看えて巍き。大将一騎鎮こと。堤と東へあゆと倚。とれは伊藤日向守。敗走自兵と悉く。静に先へ落ー遣倘朝比奈が這まをも。赴駈来らば殿馳して。當痛く戦做んものと。堤の堆丘に突立騰り。後眄顧して勒り。然ると朝比奈泰次は軍に錬る勇将なれば。既十分に自方は贏り。長対なれば過失んと凱歌揚て退返も。北條方は虎口と遁も這隙に

川と渡らんと怖足らるらせ騎趺むを。北方の岸に勒ー二陣。伊藤が勢と敢えと。河の央へ騎趺ぶ。慌忙く伊藤が兵に。推返されて懐えぬ。亦北岸へ退返も。恁る混雑に藤吉は。敗ー兵士が中へ早賢廻投混雑ーあらの。日向守に指して。這り河梢三丁程往て。水面潤き渡にあり。水底平に浅湍る。增てや敵も在ざれば。速く那瀬と渡ーぬ。あれ柳の五六株。岸と素して生る辺を。声高らに教ると。伊藤實にと心得て。従者二三人引供ー。堤續路に川末へ。三丁許歩せば。試浅深させんと二人の。従者と河間へ投ー。時分いよと藤吉郎。篁叢の中と。竇り性日向守が虚を窺ひ。騎る馬の太腹と。鑓さー舒て禹毅と鏑に。馬に駄き騁揚れば。騎持れぬ鞍共に。地响き高く揺と墜。

藤吉郎初戰ホ
冨士川の退口を
窺ふて伊藤
日向守を擊

藤吉郎ハ駈倚るゝら。鎗投棄つ即碩ゐ。両脚掴て斬僵し。即時伊藤と執て擁へ。鍔の隙虚と鏑徹まゐ。伊藤ハきとゆる豪傑なれば。蒙疲るゝらも高吉ゲ。腕掴掴を刎翻し。漸く下ゐ起くされども。落馬せ一駒太刀小刀の。四五間那方ゐ脱零て。打べき又のゐ近ゐ無ければ。拳と握てゐきゐゐ。孰誰なれば大膽ゐも。我と硬ゐて落馬ハさせ一ぞ。姓名唱れと罵ると。藤吉郎ハ鼻頭笑。我と敵んと做る敵ゐ。命と惜まば首揖せと。不敵の詞ゐ日向守増く怒て力と究め。拗殺して呉んまと。壓掩らんと為す一卸合。藤吉郎ハ利足攝て。日向守ゐ脅と。礙と蹴るゐら身と退ば。伊藤ハ前へ俯伏ゐ。喉仆と得うと起揚り。終ゐ首とぞ毆墮せり。現目覚や。今天初陣の功名と。萬夫も怖る日向守ゐ。首と毆る攘き。山王擁護の英雄ゐして。和光の人ぞ知られる。那方ゐハ亦端踏の老黨。門の中流ゐ在けるゲ。這體と見て驚顛ゲ。三人齊く取て返し。藤吉郎と遁さじと。前後ゐ罩て闘ゐり。怎て松下ゐ陣中ゐ。藤吉郎ゐ兵糧と。擔出して駒絡れども。帰らざるこそ戦場へ潜魁ゐて打果やせん。不辨の徒と嘉兵衛之綱。伴還らんと呂草騎。堤の這地へ馳着見るとば。藤吉郎ハ三人ぞ。前後ゐ承て大水ゐ。趨つ越しゐ戦ゐ這方。之綱鑓と綽整し。敵一人と鏑伏ゐ。義吉郎も踏趴く。二人の敵と斬損ゐ。伊藤ゲ首と取出し。嘉兵衛之綱ゐ見せるゐそ。鞠ゐ感嘆ゐ。始終と聞て獻猪進。先参大将の實検ゐ。備人ゐと打伴起本陣へ退返ゐ。然程ゐ今川治部大輔義元ハ。魁隊の軍勝利と得つ

敵敗北と聞しかば。最涯り多く悦驍し。朝比奈備中守泰次が軍功と賞美しける處へ。秋下嘉兵衛之綱参向なり。伊藤が首と實撿ふ備ん煒と言條しければ。義元之綱と召近づき。煒の子細と問ふ隨ひ。中村藤吉郎高吉が。伊藤と歐る始終。毛頭落々稟舒る。大將義元きこしめされ。愕入く甘心ぶ。伊東ハ了得の名將なると。容易歐しん無双の調功。如何なる者ぞ藤吉と。呼出せとの課せと承。藤吉郎と伴ふ。義元の所ふ出。高吉ハ之綱ふ座しる末ふ平伏る。義元問遠ふ藤吉が。容貌異ふして材綉く。羊と擒ふるかぞ。なき相ふ見えけるゆへ。義元これと大ふ併り。心中殊ふ疑ひとのへども。有係ハ衆郡ふ主る公。詞と飾りて稱讃きらく。誠ふ武士ハ智と勇るふ。長らまぐあるくらんべ。渠ハ貌さへ

材綉く。面相怜も猿ふ似る。然へども関外無双の勇士伊藤日向守を擊捉しく。是唯智謀と勇氣ふ在り。末頼もき壮士なり。能く扶助と加へしと。稱美の詞りしのこ。指る褒禄もみうけ。嘉兵衛も面目と施して。機會ふけれかと進出。且二の軍成ふん。魁軍と命ド るるるぐう。望ふ義元是と許されり飯尾が陣ふ加へる。然るふ朝比奈泰次ハ。初度の軍ふ打勝しるとも。其隙の兵士疲とられば。暫く休息せしもくしと。二の合戦と飯尾ふ譲り當身ハ二陣ふ隊伍る。義ふ北條氏康ハ。味方の先陣打破れ日向守さ歐とると。聞より大ふ憤怒す。自門と押渡り。戰ふぐしと敦圍く。正魁ふ馬と進める。老臣俳劇走荷。書面ふ執延。諫めつ宥めつ駐ども。聞用ひずして声烈き。急けいそげと

ケ紀一けれい。二陣の大将大道寺駿河守。間宮豊後守一隊ニ成り
即時ニ門ヶ推渡一。七千餘騎の剛兵と。魚鱗ニ纏ひて今川の。
魁軍隊伍へ冲駈る。美ヶ間宮豊後守好高ゲ。子力部の小掌ニ
伊藤矢浦といふ者あり。既ニ敵ら日向守が甥ヶ。叔父の弔
戦ヶて。亡き魂と慰めでやと。正魁ニ進で戦ける。原来武勇ニ勝
ら〜ら〜。今遣の軍い唯我身ニ。開ら恥辱と武士らて。やらら雪ヶ
で退くべきと。自匹と烈む突戦ニ。敵ニ騎まで掛墮一。四方と拂
て立ける勢威ニ。近づく兵もみき機會ら。松下嘉兵衛之綱ハ。
厥と覩るより鎗絶整一。馬と飛せて矢浦ニ近倚。号呼掛て掛
発も鎗。双方ともニ鎗術の。誉と得る勇士と勇士。尊扱鋭く
亘合。陽ニ掛ヶ陰ニ拂ひ。一乾一坤委とヶ天合地用ニ隙

あらせぞ。阿と進も声い山ニ响け。吽と退音川ニ磊き巍〜〜も
亦猛〜〜。肘枝鏑んと閲も。槍の尖頭い黒雲と。霹と破り〜
霹靂ヶ。闇夜を走るニ異ならぞ。鎗尖拂ニ疾相い。巖うち返
も荒濤ヶ。月影碎くニ髪鬟ら。面も振らも稍半晌息さく
次ヶで戦ひ〜ヶ。伊東ヶ鎌鑓松下ヶ。鎧の発ヶニ引懸ると矢浦
い獲ら〜と力と烈ま一。掛僵さんと働ける。嘉兵衛焦つ〜外
さんと。もれども毛引の鎧ゆて。心の侭ニ揮得ぞ。殆危ヶ見え
る處へ中村高吉走倚。伊東ヶ鎗の真中と。丁と二段ニ砕放
てば。贅と寛めて引ける矢浦。臀居ニ揺と仆まヶら太かひき
脱んとする隙い遅く。藤吉郎い逸疾〜。太刀鋭そぐ〜伊
藤ヶ脇肚。鞆も徹ると刺ける。痛癒ニ堪匹仆て憂と松下

藤吉郎の智勇主人加兵衛の危急を救ふ

馬より跳て下。矢鏑が首を掻切て。かふ貫きさ〜揚〜うぶ。今川方ハ衆声あげ。楯と敲て讃〜うける。北條方ハ是と見て。甚鋭氣と堅まるとも。間宮ハ更ふ異ともせぢ。士卒と励ま〜戦ひ〜が甚日も酉ふ幾きければ。双方遁ふ軍と退揚。勝負ハ明日決せんと亀代〜てぞ退陣せと。

今川北條於富士野和睦 屬藤吉発志

這ふ甲州武田の勇士。山縣三郎兵衛尉昌景。山本勘助入道道鬼齋晴幸ハ。今川北條両家より。甲陽武田信玄へ加勢の支と謂投ければ。使者ふ應じて出陣ゑ〜。三千餘騎と引卒して江尻の驛ふ陣と張。是まで両家へ援兵せぎる。其趣と尋るふ。原来甲斐の武田信玄思慮最深き大将ゑるとぶ。山縣山本ふ人數と添。駿州江尻へ出陣さを。両家合戦の號蹊とうぶひ。塩合ゑき頃利と解て。和睦させと下辞〜くれば。時分やあると後程とそ。今夫まで日きへ暮まれ向ふ。今川北條の両軍勢。双方相引ふ退さ〜うぶ。和睦の時ハ今ゑると。山本勘助晴幸ハ。北條氏康の陣ふ赴き。山縣三即兵衛昌景ハ。今川の陣ふ参〜う。斯て山本勘助ハ。陣燎と點ぎる頃。禮服整〜て本陣ゑる。大将氏康ふ對面〜。主人信玄懇切ふ。稟越さるその詞材ハ。這遭甲府へ加勢の〜。課超さ〜使者ふ〜ふ〜。主人自身軍と牽ひ。出陣まべき該るれども。預て〜ろ〜めさ〜如く。武田今川両家の義ハ久〜き親族ゑるうへふ。信玄の父信虎煒ハ。義元が許ふ住〜く。厚〜ゑ抱と蒙〜う。然まれば信玄。今川家ふ敵もるとと。父ふ

向ひて。弓を引き異ならむ。而いあれども當家より。頼まんと請て出陣せむんば。臆まるを侶て。外聞よろしからぬ。是ぞ人數と牽ひ出張に為つれども。熟思案と続らまふ。這遭西家の合戦に最無名の軍にして。實に意なき闘ひなり。是と込て信玄より。料簡と稟て容ていに。開も北條家と。今川家に。快より一家の好ありて。世の俗貪なるところなり。然るを近来説者の爲なや。斯桙楯に賢をれさらん欲。今吉精〳〵承りさ〳〵。倘亦當家の勢剛〳〵。関八州と前隨威風に靡くゲもゆるさに。関より西とも破取らんの。所存なるべ道なるぬ。不義の軍と出をに似さり。斯稟さば憚多〳〵いへとも。所祖父早雲寺殿に今川氏親の許に在ひ。厚き恩澤のまるまで。兵士と借て相互と破取り。運と開うせるひ〳〵緯に。三歳の児も能知まり。所詮子孫に在ばら。不義の軍と発されしば。武士の為まぢき緯なるもや、斯る結構〳〵まべ。孰に人援兵〳〵まべき。現不義を道の軍に名なるや。さ〳〵に強き當家の陣隊。二度まで敗走〳〵のこと。名ある勇士も毆まそい。先速に所和睦あることそ。歸ハまハのれ。主人の存念斯〳〵せべとて。曾て今川と員負まるるまで。無名の軍に兵士と損ひ。名と折他に咲ることと。朽憾にハいらハまや。快今川へも和談の緯。山縣と以て謂入されば。義元も異義に稟まず。當家の所父子事と好まれ。此義に隨ひるべ。主人も是非なく道理に属。今川義元が勢と援、有をの勝負と決まべし。倘亦所當家所和談あらんと。義元違背いるまるハ。當家に助勢〳〵今川家と。左右なく馬蹄に駆散さん。ぐれるるとも所當

家の返答次第信玄ゐも心を決して了簡をゐ所應詞承知つる
まゝ〳〵と。すこしも憚る氣色なく。稟容まゝ北條氏康。案ゐ相
違ハ〳〵なくも。勘助晴幸ゲのもを謀。こゝム理ゐ中りぬれバ。何と
會へん辞もなく。夜曉るまでゐ逗留ぞ〳〵と。起んとまると勘助
かさねて。北條今川武田の三家。安危存亡なる絆ハ。唯所逗留の
次第ゐあり。克く所賢慮あれゝと。今霄ハ山本晴幸も。北條
の陣ゐ止宿せり。又ゑ氏康ハ夕深るまで。諸將と聚て評議し
けるゐ。今川の一家さへ。剛敵ゆて御ぎ匹きゐ。增て武田の勢
加ならバ。勝利と得ん絆難くらん。和議こそ萬全なるべ〳〵と。評
議一決なりけるゆゑ。勘助入道と葬び招き。和睦承引せ〳〵譯と。
誓紙ゐ記して返答せり。入道晴幸左右なく喜び。聖と若て

執て返し。今川の陣ゐ走きけり。偖義元の陣中ゐハ。山縣三郎兵衛
昌景。和談の絆と謂投けるゐ。義元快く是と諾ひ。三郎兵衛と
饗應どりくら。山本勘助も茲ゐ來り。氏康が返答の次第と舒。早
速這等の準備と調へ。翌日両家富慈野ゐおいく。和睦の對面
ありけるゞ。山本山縣這と斟酌。以後隔心と相加へも。遍ゐ救ひ合
べき旨。盟約なして和儀こそのゝ。北條父子ハ軍と纏め。小田原城へ
帰陣しくれバ。義元もまた府中へ退馬し。武田の両士と厚く歓待。
深く謝してぞ還されける。然るゐ今川義元ハ。這遺の軍和議して。
戦飽ぎとりて雖。日向矢輔の二雄と打捉。自方充分贏ありとて。
喜悦の剰り酒宴と催し。諸士と犒ひ功と賞美し。恩と賜る中ゐ
就て。松平嘉兵衛尉之綱ハ。初度の軍の功名ゐハ。伊藤日向守と

信玄の中策
今川北条を
省て富士野に
和議を辨ず

うち取。二の合戦の誉柄あり。伊藤矢猟と敵し緯。自軍第一の功あり。
且い今門家の威風とゝ。関東へ吟うせうとそ。五百貫と加増せらる。
是食藤吉郎高吉ゞ。功労あてありゆれども。陪臣の身なるとゝて。
主人松下ゆゑ賜賞ありて。高吉ゆゑ沙汰ゆ。然るゆ中村高
吉い。和睦と熟談機會ゆつけ。甲府の両士と窺ゆゆ。武田の軍師
山本入道道鬼齋い。材幾して越政ゆ。まして眼い一片瞽ゆ。山
縣三郎兵衛昌景い。大材ゆれども鬼口ゆ。武田ゆこれらの勇士
あること。見ぬ今天まで鬼神より。猶猛ゆんと思ひ。憶矣止ゆ
躰具ゆらぞ。然もれば我い縛生ゆて。顔色猿ゆ像ゆうとも。五體ゆ
闕ゆる所ゆければ。ゆも勘助ゆい劣るまじ。先這上い智と磨琢。天下
ゆ美名と裏ゆせんと。初て大志と起せり。實天然の名將ゆ。又ゆ

松下い睦と貶ゆ。遠州濱名ゆ迄ゆ加増の緯ゆ悦堪て半月
許もぞ一ゆるゆ。這遭藤吉高吉ゆ双の淨ありゆ依て。不時の
加増と得ゆる緯。食高吉ゆ貶るゆゆ。今日より子とゆ我子の如く
懷ゆゆれば。松下の氏と貶ゆゆ。然して永く縁と結ぶん。子の心い
那何ゆぞと。尋ねゆ藤吉ゆと又き。誠ゆ冥加ありゆ。然ども匹夫
の基へ。松下の氏と貶ゆる緯。明輩の所思といひ。諸人の妬もあ
べりれば。容易所奉ゆ。ゆれ謀き所芳志ゆて。課下さる
所恵と。辞退ゆゆも憚りあれば。小呂所存とゆゆ。承
地ゆらべ有ゆゆやと。いゆゆ之細小頭と願け。所存とゆ之那何ゆる
緯ぞ。然侍方僅貶ゆゆ。所名氏と在の信ゆ緯領ゆさべ。先ゆも
稟も混雑あり。晞くい松の字の。偏ゆ用ひて木下と氏と革ゆ

かゝーう。然まれば公と相並ぶべき。君臣上下の禮ふも稱なん。汝許容ありやと稟もふぞ。之綱弼感佩し。公とりゝ字を我ふ戻し。木のもと取て氏とせんとへ。實ふも萬事ふ缺見ふき。真心顯て賴もし。那何ふも子が所存ふ信せん。才子こゝと誉られければ。是より中村の氏を棄て木下と革めゝう。嗚呼感ぜべし嘉兵衛が。松下の氏をもて高吉ふ付ゝ一つもど。雲蹈大志の藤吉郎。公と除ひて木とのみ取。巧ふ木下と口料せーへ。實ふ〳〵天下の將ゝるべき。神作天然の兆ふ出イ。公下ふ屈せざる證を顯も。木ハ其東ふり春氣ふり。四海を治もる人の始ふ。ゞ東と氏ふ立るへ。是登天の真理ふ稱ひ。童名日吉の孕める時。日輪懷裡ふ入ふける。母が夢想の因とめて果を結べるの方と掌る。それハ理とりて說道ふあれど。再び事ふ付ゝ

ゝゝんべ。原来藤吉郎高吉ハ木下の氏ふ生れゝり。父ふりける中村弥助昌吉。織田ふ仕て氏を革め。木下と号ゝ。あれば。今藤吉が郎智もて。公と並ぶぬ意ふりと。挨拶ふ追び詞。實ふ妙才と謂ゝべし。

増て大義と企つ高吉。松下ぐゝきの部下ふいぐゝ屈もる意あらんや。日吉丸が其初ゝ戸ふ来りて武門ふ入ゝ東海道ふ。蟠もる今川義元と。名將ふりと思ひけるもの。直勤せんとて昨日ゝ。松下が許ふ留ゝるゝ。其義元ゝ。意ふ稱ゝべ。這遭富士川の合戦ふ。高吉ゝ類の高名せゝ。義元ゝ。高吉ふ。褒賞賜服ゝ。直泰ゝゝむべきと然ハせぞ見至らぞして。藤吉郎と奴僕ふりと輕んト賤しめ孤疑の念ふりつゝん。他の賢愚と知ること能ゝべ。それふ從ゝ嘉兵衛父子が。高吉と推挙もせぞ。自己が五百貫の奉賞も。藤

吉郎が助帯あると。聞て是が報いあるべしと。我子ふせんと料理つるこそ。
吾ゆや謂ん愚ゆや言ん。然ども從來学問の恩ありぬれば隔意ハ
ゆ〜。松下が家ふ努力しぬれど。蟠龍ゆんぞ鮮究ふ傳まるの所謂あら
んや。道ゆき邦ふ日と送り。徒ふ老と迎へんより。他國ふ至りて賢良
の主と撰び。莫太の功と立んあと。既ふ思起しゆべ方僅松下の氏と
譲られ。親子の間と結びゆべ。大事の家の妨ありと。遠と慮て承ぐう
しを。心属ざる之間こそ。最ゆゆゆべ思れる。斯て春尽夏起て。
八月の首旬とありしが。主人之綱の代賽として。秋葉山へ登りける路。
三面大黒天の像と拾得る。瀆名ふ歸りて這由と。主人嘉兵衛ふ
譚られば。松下ゆゆゆべ喜びて。這福神と信ずる駒ハ。千人の司とある。
増て三面ありければ。三千人の長ならんふ。怠る錐ゆ〜信仰せうと。頻ふ

高吉と勧めけれども。敢て信ずる氣色もなりき。機會ふ觸時ふ臨
みてゆゆふ留る相なければ。主人嘉兵衛之綱。藤吉郎と往来ゆゆく。我
家ふ留居んと工夫し。門村次郎右衛門とりふ者の。娘とめつて嫁らせ
り。然ども此女愚鈍ふして。廉吉郎が顔姿醜きと痛く嫌ひ離れん
煌のゆ思ひつるが。容易く去ずきゆふ隙ゆく。心ふ深ゆで月日と送れり。
明ばゆ元年ふて。其春二月の甫なりしが。朝比奈備中守泰次。
主人三人の命ゆて。領地の巡見ふ出る次取。松下が家ふ止宿して。
夜分ふ及び茶の友ふ。富士門軍の話しけるが。其節矢鋪が鎌鎗ふ。
鍔と掛て難義の由。ゆりの駒こそ預て所。尾張國の新製鎧をれ
らの愁ゆき指他あり。知りもやと問ふ松下。那何ふも其義ハ所
つるが。品と見ぎれん得と知らぎ。早速一條の鎧と購め備得ゆつ

び製まゝと。即時に藤吉と呼出し。子が國にて製しぬる鎖の得の有ると。紀ゝや否やと尋ねらるに。藤吉郎は問に應ず。それは普通の捕縁笛より。其長聊異なりれ。右の脇にて彷徨り。屈伸自由にせしのみなれば。得用まくりて。胴丸と号けうと。答に嘉兵衛然べとて。黄金六両執出し。藤吉郎に授しゝ。不日に尾張へ発行。新製鎖と購来よと。吩咐られて高吉は異義なく。これと領兼し。黄金と受得皇と告。自宅へ歸りて発足の準備しつゝと妻の於格。良人に對ひて謂けるやう。家丈尾州に帰り来べ。再び這地に還り来ト。妾獨がいづくにか。那日まで待つも甲斐なからん。晞に伝傳の縁と断。證状と書て賜ひねと。いふに藤吉嘆息し。肯ぬ誰に謂所もれど。

諾なぞ。只管離縁と望むぞ。有係の高吉有剰し。汝然ぞ。に皇とのぞまべ。即時に證書と遣もせんが。後に悔とも遅りはせじ。離別の印に貺ふべき。究竟のものこそあれと。襄日に据ひし三面の大黒天と取出し。格女に貺へ教て謂やう。汝に福神と信もれば。三千人の司となるとのゝり。汝這后よく祈て。富貴と得よと所もあつぞ否く妾い這像に。望をかければ家君こそ三千人の司とも。ならて成べと。まに取らで突捩もと。藤吉郎い冷笑ひ。大丈夫なる意志。那何でゝ大黒のかと借らんや。三千人いのふに足らぞ。四海の人の頭領と成とも。猶こが所念は足らとせぞ。見よく壊もてつくれる。這大黒と心中の。卜筮とて誓と。そん。先斯ごとと謂まふ。庭に居る石盤に。大黒

高吉
濱名城
辞するに臨み
三面の
大黒天を
砕く
大志を
發起

天の像と載せ。大鎚鎚をて括怒と撞バ。袋俵いりてあも足らさ。五體も微塵ふ碎けり。藤吉郎い莞爾と笑ひ。此斯像と祈ら眴ハ一面とも一千人の。司とゐると聞らハ。方僅斯微塵ふ碎〳〵大黒。一欽とも一千の人數とゐて算ゐる眴ハ約日本六十餘州の。男女と剰さぞ集むるらも。いまゞ足もとゐべ〳〵。我心中ふ望む所ハ。斯の如〳〵と謂聞ければ。格女い軍まて辞もゐきを。藤吉郎ハ筆疾ふ。離縁の證書終り。格女諾女ハ本諾ふ〳〵。曉る卯天。濱名と発旅尾張ゐる。故郷と當て赴きける

繪本豊臣勲功記初編卷之二終